

横穴墓の研究（6）

一形態・構造面からの検討を中心に

古墳時代研究プロジェクトチーム

1. はじめに

前回までの（1）～（5）の検討では、横穴墓の検討の基本的な視点として、横穴墓の地域的特性を示す特徴的な墓制として立体的な構造面からとらえることを目標とした。そのため、横穴墓の構造を基本的に規定する羨道から玄室床面にかけての平面形態をⅠ（台形）、Ⅱ（方形）、Ⅲ（撥形）、Ⅳ（不整形・小形）に区別して全体の大分類とし、構造の立体的な特徴を表す主軸方向の断面（縦断面A～F）、主軸に直行する断面（横断面a～d）、および造り付けによる埋葬施設（付帯施設）の3つの構造要素を組み合わせることで、多様なあり方を示す横穴墓の構造の個々の特徴と相互の比較対照のためのより客観的な基準とする分析視点をもって進めてきた。

こうした分析視点をもとに、横穴墓から出土した土器を時間軸の一基準として、検討可能な神奈川県内で調査された711例について、平面形態の大分類毎に年度にわたって構造の特徴とその年代的なあり方を含めて検討を加えた。紙数の関係もあるが、それぞれの大分類毎の検討では分類内での特徴、構造の年代を含めた傾向性について費やし、分類間の関係や構造上での相関関係、出現および盛行などの本質的な問題についてはほとんどふれることができなかった。例えば、Ⅰ類の中での方形に近い台形、撥形に近い長台形などの中間的形態分類の相互の関連や出現時期、盛行などの変遷についていかに考えればよいのかという、本質的な問題点の解明に関わる部分については、十分に意が尽くせたとはいえない状態である。

そこで、今回は本テーマのまとめとして（2）～（5）を通して大分類毎の形態のあり方の検討結果を叩台として、形態相互の時間的な消長を含めた関連性や傾向性、神奈川県内の横穴墓の形態の特徴について検討を加えていくことにしたい。

（長谷川）

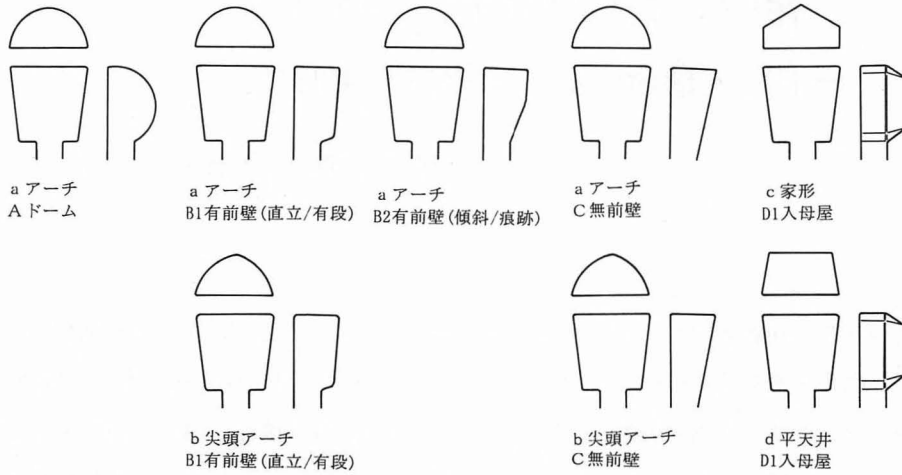
2. 類型の概念規定

Ⅰ～Ⅳ類の検討で使用したすべての形態は、視覚的理解の補助として第1～5図に提示した。平面形、縦断面形、横断面形をセットとして掲載し、付帯施設はこれらに組み合わせられることとなる。挿図は平面形態を基本とし、縦断面形を縦列で揃え、横断面形は上部よりa～dの順送りとし、各図には分類名を提示した。

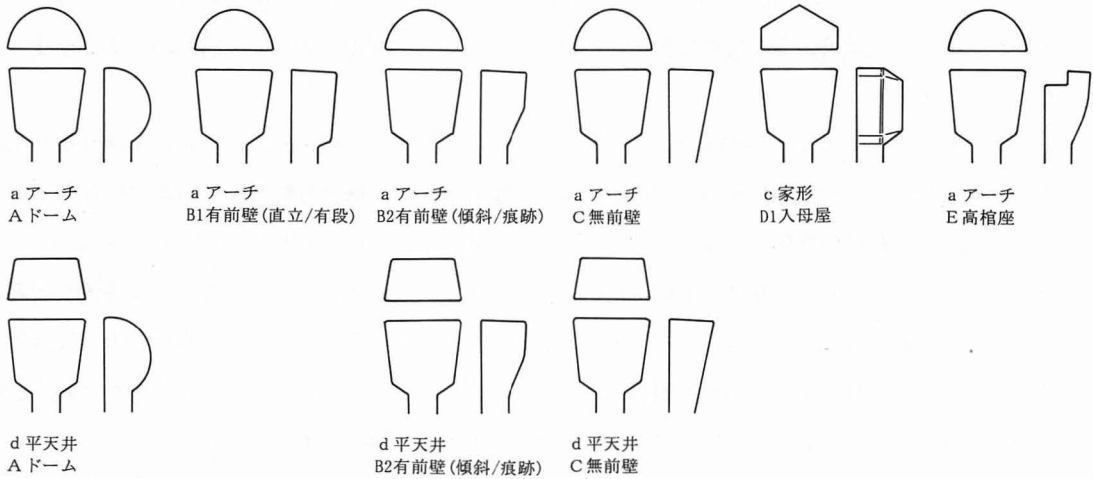
先に示した分類の概要は以下の通りである。平面形はⅠ類が台形、Ⅱ類は方形で、それぞれ短・長でa・bと区別を行い、棺室構造としてcを設定し、前壁の有無及び角度からも1～3と細分した。Ⅲ類は撥形で、形態によりa～cに、付帯施設の有無からはA・Bと細分し、更にその構造から1～3と分類した。Ⅳ類は不整形で、前壁の有無からa・b、更に小型をcとした。縦断面形は、A～Dを天井形で、E・Fを埋葬施設の形態を主眼に分類している。Aはドーム形、Bを有前壁とし、更に前壁でB1は直立／有段、B2は傾斜／痕跡とした。Cは無前壁、Dは家形とし、D1で入母屋形、D2で切妻形とした。Eは高棺座形、Fは棺室形である。横断面形はaアーチ形、b尖頭アーチ形、c家形、d平天井形とし四項目の細分としている。

（柏木）

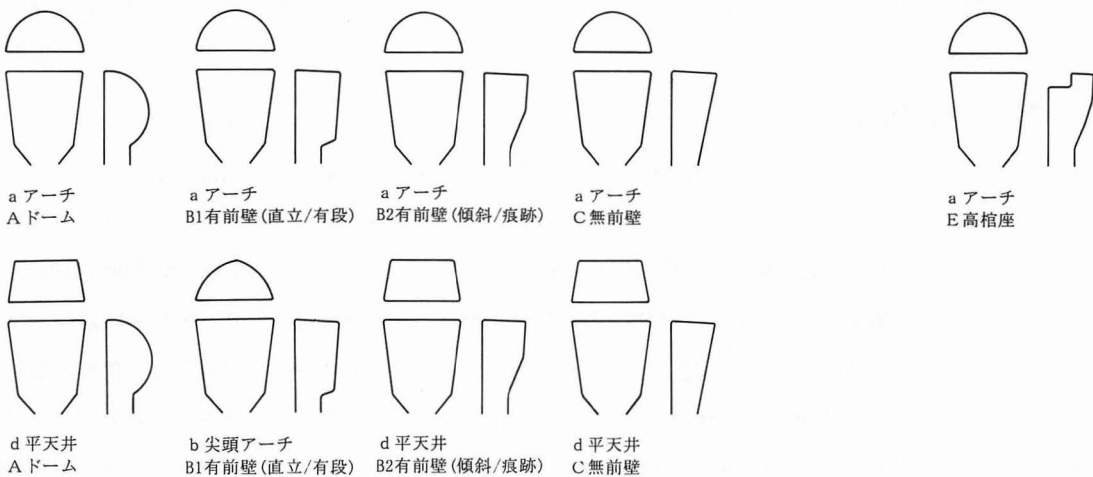
I a 1 台形 (前壁角110° 未満)



I a 2 台形 (前壁角110° 以上)

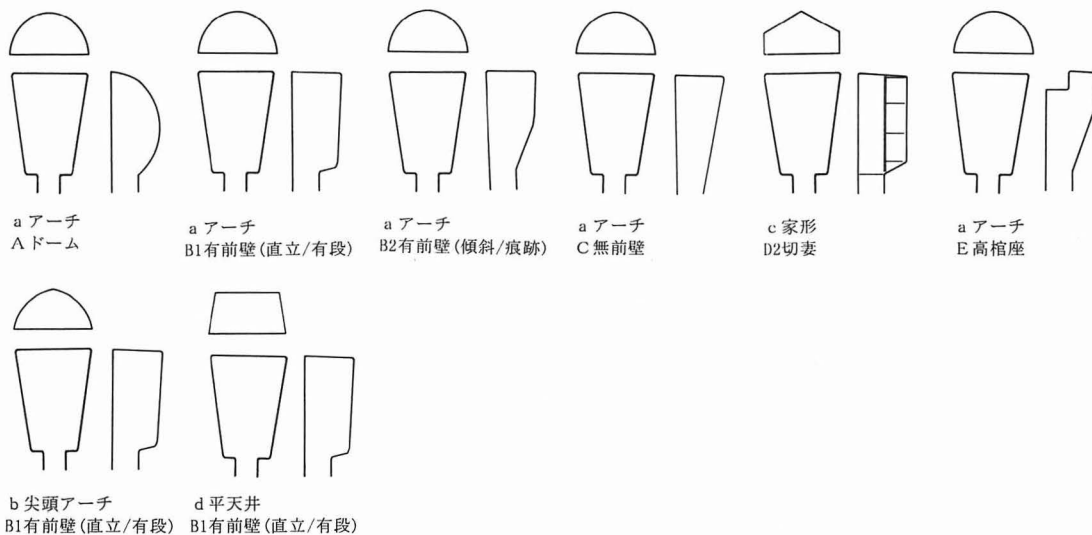


I a 3 台形 (前壁痕跡化)

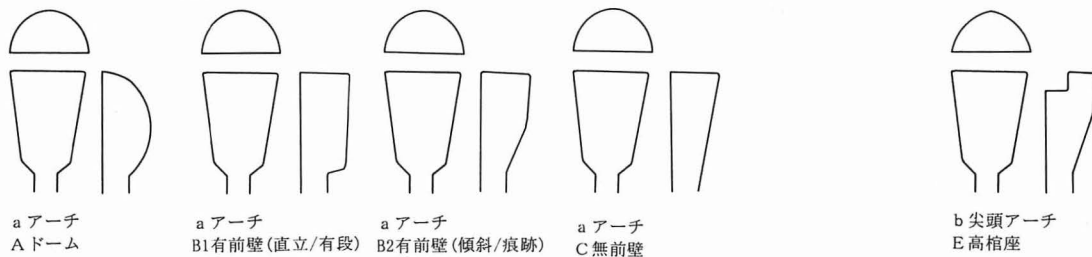


第1図 集成横穴墓の形態 その1

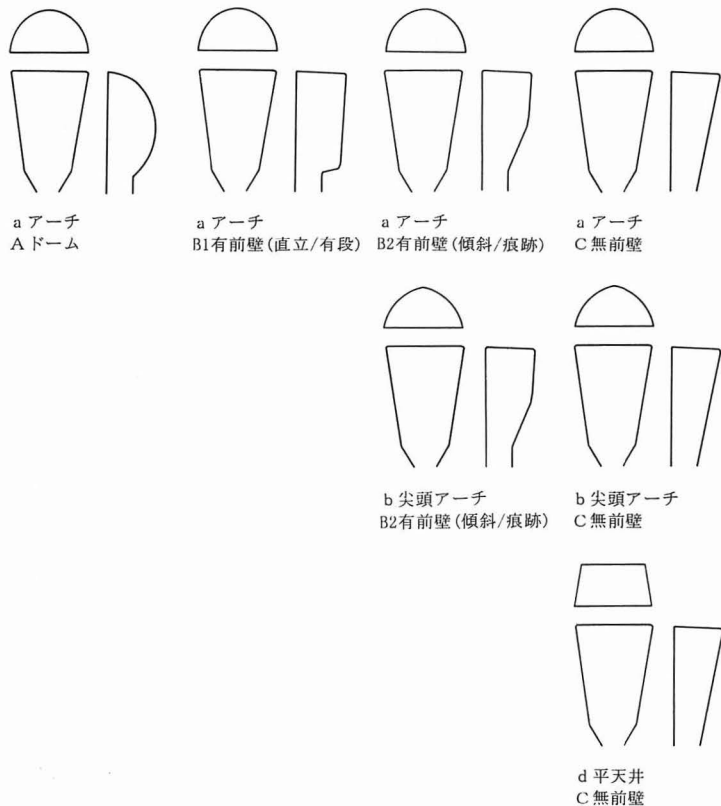
I b 1 長台形 (前壁角110° 未満)



I b 2 長台形 (前壁角110° 以上)

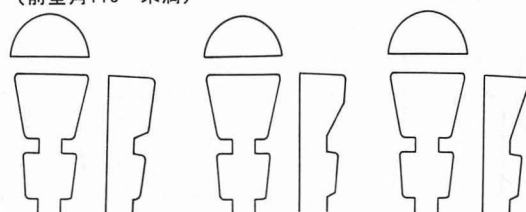


I b 3 長台形 (前壁痕跡化)

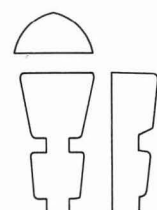


第2図 集成横穴墓の形態 その2

I c 1 複室構造 (前壁角110° 未満)

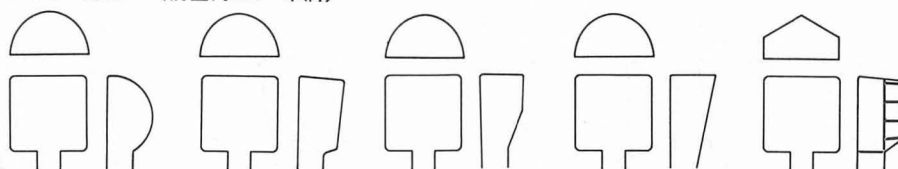


a アーチ
B1有前壁(直立/有段) a アーチ
B2有前壁(傾斜/痕跡) a アーチ
C 無前壁

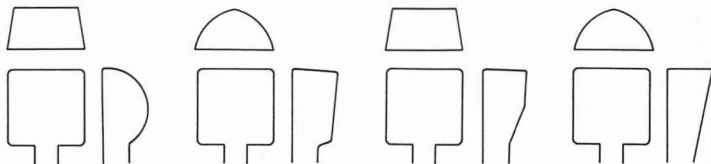


b 尖頭アーチ
B1有前壁(直立/有段)

II a 1 方形 (前壁角110° 未満)

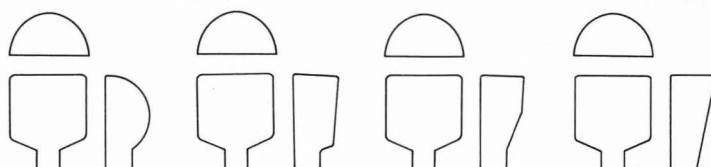


a アーチ
A ドーム a アーチ
B1有前壁(直立/有段) a アーチ
B2有前壁(傾斜/痕跡) a アーチ
C 無前壁 c 家形
D2切妻

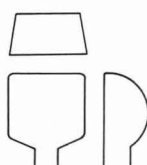


d 平天井
A ドーム b 尖頭アーチ
B1有前壁(直立/有段) d 平天井
B2有前壁(傾斜/痕跡) a 尖頭アーチ
C 無前壁

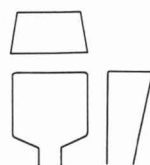
II a 2 方形 (前壁角110° 以上)



a アーチ
A ドーム a アーチ
B1有前壁(直立/有段) a アーチ
B2有前壁(傾斜/痕跡) a アーチ
C 無前壁



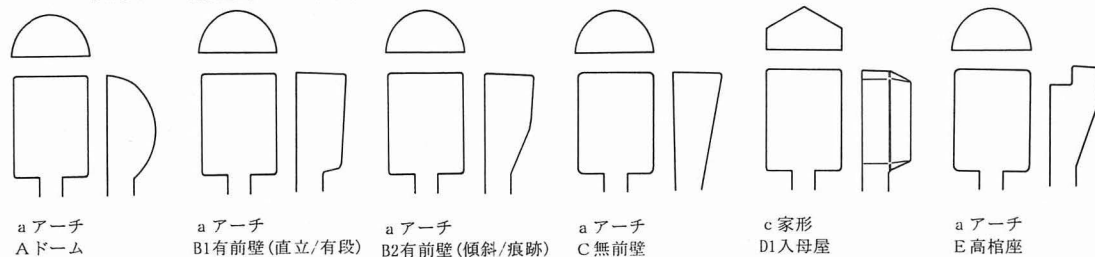
d 平天井
A ドーム



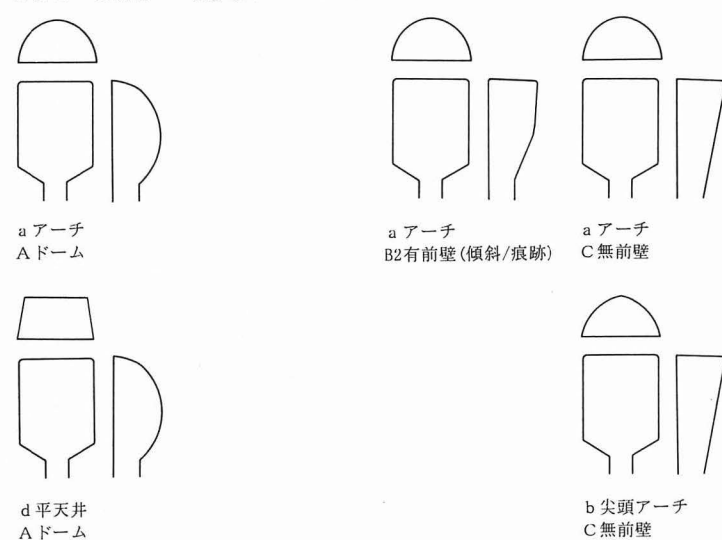
d 平天井
C 無前壁

第3図 集成横穴墓の形態 その3

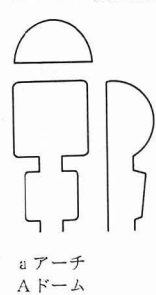
Ⅱ b 1 長方形 (前壁角110° 未満)



Ⅱ b 2 長方形 (前壁角110° 以上)

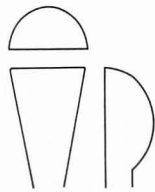


Ⅱ c 1 複室構造 (前壁角110° 未満)

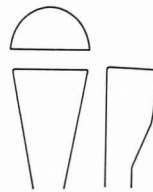


第4図 集成横穴墓の形態 その4

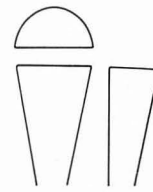
Ⅲ a 撥形 (付帯B無し)



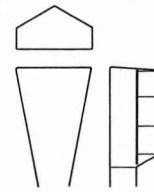
a アーチ
A ドーム



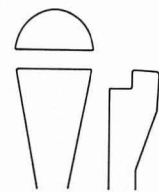
a アーチ
B2有前壁(傾斜/痕跡)



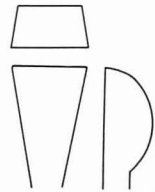
a アーチ
C 無前壁



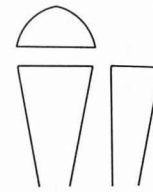
c 家形
D2切妻



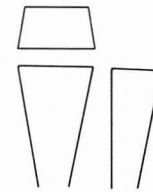
a アーチ
E 高棺座



d 平天井
A ドーム

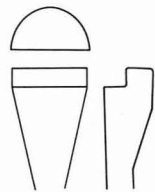


b 尖頭アーチ
C 無前壁



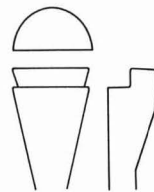
d 平天井
C 無前壁

Ⅲ b 1 撥形 (付帯B有り)



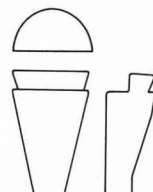
a アーチ
E 高棺座

Ⅲ b 2 撥形 (付帯B有り)



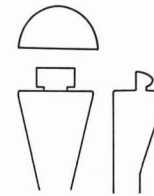
a アーチ
E 高棺座

Ⅲ b 3 撥形 (付帯B有り)

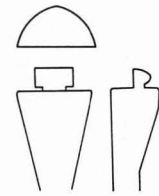


a アーチ
F 棺室

Ⅲ c 棺室構造 (付帯B)

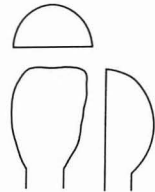


a アーチ
F 棺室

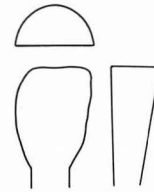


a 尖頭アーチ
F 棺室

Ⅳ a 不整形 (無前壁)



a アーチ
A ドーム

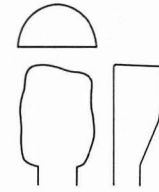


a アーチ
C 無前壁

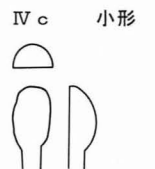
Ⅳ b 不整形 (有前壁)



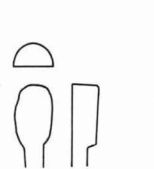
a アーチ
A ドーム



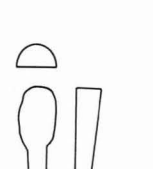
a アーチ
B2有前壁(傾斜/痕跡)



a アーチ
A ドーム



a アーチ
B1有前壁(直立/有段)



a アーチ
C 無前壁

第5図 集成横穴墓の形態 その5

3. 横穴墓出土土器からみた形態・構造面の変遷

横穴墓の形態と出土土器については、(1)で年代の指標となる須恵器の変遷について基準を示し、(2)～(5)の検討でその基準に基づくⅠ～Ⅳ類の各類別から出土した土器の年代について検討を加え、各形態の年代的な消長、特徴についてふれてきた。各形態の横穴墓から出土する資料的な性格として、横穴墓のような追葬を前提する墳墓では構築当初から少なくとも1回以上の葬送が行われ、出土する土師器、須恵器が必ずしも構築当初の年代を示すものではなく、当初の副葬品が追葬時にかたづけられていることが前提として考えられる。そのため、横穴墓から出土した1点の土器をもって、その形態の構築年代を決定することは、問題がある。また、出土した土器についても、全てにわたって実見にもとづく観察ができないために図面上で判断せざるえない状況もある。同様に、横穴墓の形態分類の中でも、中間的形態の所属をめぐるは数値化による基準によったが、必ずしも該当分類に的確に対応するかの保証はないという可能性もある。いずれにしても、形態の特徴と変遷の方向性を踏まえた上で相互比較をせずに、出土土器だけで形態の年代的な消長を決定してしまうことには大きな誤認を生ずる可能性がある。

こうした資料的な認識上の特徴から、まとめとして横穴墓の各形態の消長の相互比較をふまえての検討を試みるために、いくぶんかの資料の操作を加える必要がある。その操作としては、各形態からの出土土器の年代が新旧全体にわたり、中間に空白期間がある場合は、古い段階の年代幅をとる。形態相互の比較をする上で出土資料が少なく、明らかに年代的な齟齬がでる場合は、土器からの検討は保留とする。こうした前提で、各形態と出土土器の相互関連をみていくと(第1・2表)、以下のとおりの形態変遷の傾向性を指摘することができる。

1. 平面形での総体的なあり方をみた場合、台形(Ⅰ類)、方形(Ⅱ類)形態が概して他の形態よりも先行して出現し、その後に撥形(Ⅲ類)形態が7世紀中葉以降に各種の形態が構築され始め、さらに7世紀第3四半期頃から不整形、その他(Ⅳ類)が出現する。
2. 台形(Ⅰ類)、方形(Ⅱ類)を相互比較すると、台形(Ⅰ類)のうち奥壁と側壁の長さが均等になる形態(Ⅰa1～3類)、方形(Ⅱ類)の中でも長方形形態(Ⅱb1類)で前壁を有すタイプが6世紀後半にかかると年代から出現し、追葬による新しい年代の土器を除いて考えると7世紀中葉前後まで構築された可能性がある。
3. 撥形(Ⅲ類)の中でも高棺座(Ⅲb・E類)、棺室形(Ⅲc・F類)は7世紀中葉以降後半にかけて盛行する傾向がうかがえ、典型的な撥形(Ⅲa類)は7世紀中葉前後から前壁の有無に関係なく出現し、いずれも後半まで構築されている。しかし、Ⅲa類の場合、内部施設との関連でみると造付ないしは組み合せ式の石棺(4・5類)を有するものは、先の方形、台形形態の横穴墓の出現期に近い時期にみられ、撥形の一部の形態は、比較的早い段階に構築されていた可能性がある。
4. 不整形、その他(Ⅳ類)は、7世紀第3四半期から8世紀前葉まで利用され続けている。
5. こうした形態の総体的な変遷の傾向性を考えられるが、必ずしも断面形での退化の方向性(縦断面形での前壁の有無、横断面形での家形、平天井形からアーチ形へ)とは合致しないこと、平面形は相対的に新しくみられるが、内部施設との関連では古くなるものがあり、神奈川県全体でみた場合は、総体的な形態の変化の方向性ととも、出現期については多様なあり方があったのではないかと予想がされる。
6. このため、総体的な変化を踏まえて県内の地域毎の状況について検証を進めていく必要がある。(長谷川)

第1表 平面形・縦断面形の各時間幅

平面	概念図	立面	概念図	年 代									
				580	600	645	660	671	681	700	715	725	735
I a1		B1											
		B2											
		C											
I a2		B1											
		B2											
		C											
I a3		A											
		B1											
		B2											
I b1		C											
		E											
		B2											
I b2		C											
		B1											
		B2											
I b3		C											
		B1											
		B2											
II a2		A											
II b1		A											
		B1											
		B2											
II b2		C											
		A											
		B1											
III a		A											
		B2											
		C											
III b1		E											
III b2		E											
III c		F											
IV													

第2表 III a 類付帯施設の各時間幅

平面	概念図	立面	概念図	年 代									
				580	600	645	660	671	681	700	715	725	735
III a		1a-1											
		2a-1											
		2a-2											
		3											
		4b											
		5a											
		5b											
		6											

4. I～IV類横穴墓の数値的検討

数値的な側面からの検討は、前回までの各表の最頻値を用い、全体での傾向を把握していくこととする。基本的に各類における数量の多少により規制されるものであるが、これは最も標準的な各類の規模で比較することを表し、それにより全体的な様相が把握されるものとする。しかし、前回までの検討において提示した事象は、各類の横穴墓数などとも相俟って、各類の間において比較した結果をすべて提示できるものとはなり得なかった。そこで、各類における詳細は前号までに譲ることとし、以下数値的検討により判明した総体的な見解を提示する。

玄室面積と平面形態

傾向として玄室の規模では、前壁有りから前壁痕跡化へと小型化し、無前壁に至り大型化する傾向が看取されている(第6図)。I類(台形)・II類(方形)のa・b類(短・長)の関係は、奥壁規模の相違は認められないことから、b類でほとんど面積が大きくなっており、奥壁幅も相対的に規模に応じて変化していくことが看取されている。III類(撥形)においては、大半が玄室と羨道の区別が不明瞭なものであったことから、計測値D(側壁が最も狭まった部分)の位置を玄門として計測を実施している。III類のなかでも一部では框石などの存在が認められ、空間の分割が意図されているものもあるが、主体的な様相は呈していない。IV類(不整形)のなかで前壁の有無において分類したa・b類においては、該当横穴墓数が少ないものの、形態による面積の変動は認められていない。面積においては小型としたIVc類が、I～III類に存在する3㎡未満のものよりも、更に小規模な一群として把握されている。

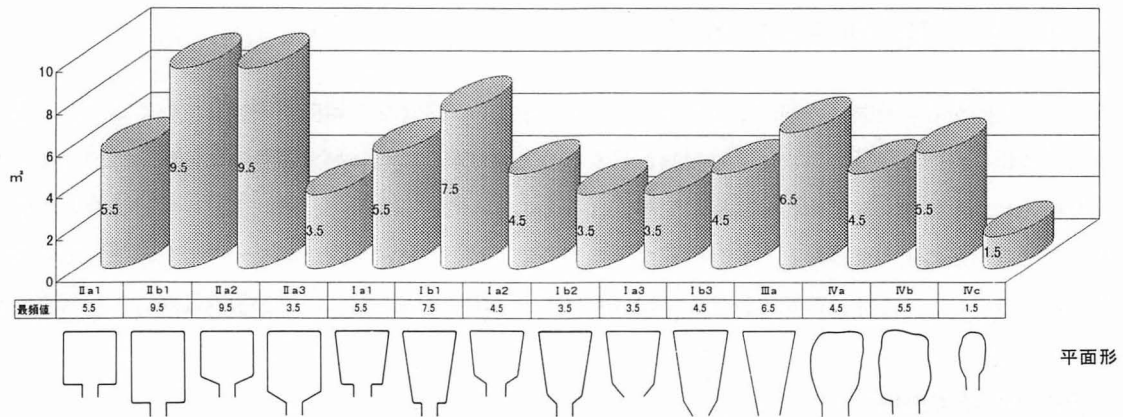
玄室面積と奥壁高 —縦断面・横断面の検討—

I～III類での面積と玄室高さの関係においては、最頻値が30～40%の範囲に集中し、基本的に形態が変化しても、奥壁がアーチ形をものを中心としては、面積に占める玄室高さの「%」は変わらないものであった(第7図)。それは、玄室面積が小さくなれば、高さもそれに比例して低いものとなり、玄室面積が大きくなれば高さも比例して高くなる現象として捉えられる。しかし、前壁の存在が明瞭なものは、20%以下に最頻値の広がりを持ち、面積に比しての高さが比較的低いものとなっている。また、前壁の存在が不明瞭になるに従い高さの占める「%」は40%以上の最頻値を持ち、面積に比しての高さが高くなる傾向が把握された。IV類では玄室面積に比した玄室全高の「%」が、I～III類に比してIVa・b類で低く、IVc類で高いものとなっている。これは面積の規模に対して玄室高がIVa・b類で低く、IVc類で高くなるものとして把握される。高さの規模において小型化するIV類のなかでも、IVc類に限っては面積が狭いものの、高さでは他の類とさほど変わらないものとして捉えられる。

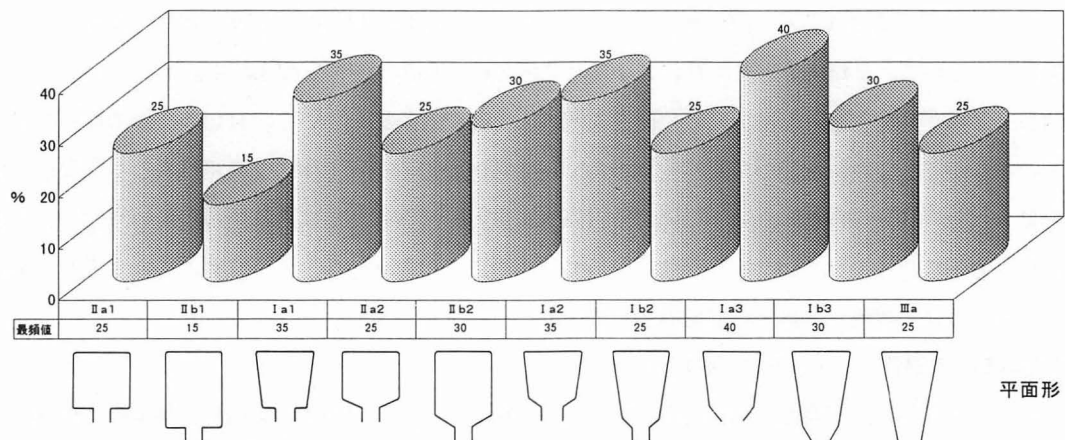
付帯施設 —棺座を中心として—

棺座長

I・II類では、玄室長に比した棺座長は、前壁を持つものにおいては20～70%と幅を持ち、前壁が不明瞭となるに至って棺座長の占める「%」が大きくなり、III類に近い様相を呈することとなる。棺座の占める「%」の拡大が最も普遍化するのがそのIII類であり、なかでIIIa類における付帯施設Aは30～50%に集中し、かなり広い埋葬スペースを占めることとなる。IIIb・c類における付帯施設Bの長さは、1→2→3へ最頻値の「%」が大きくなり、僅かながら埋葬スペースの拡大として把握される。IV類では1基の存在が認められるのみであり、他の類との比較は行えなかった。



第6図 玄室面積の最頻値比較図



第7図 奥壁高／玄室面積の最頻値比較図

棺座高

前壁の明瞭なⅡb1類（長台形・前壁角110°未満）と、その他棺座長の検討において埋葬スペースの拡大が把握されたⅢb・Ⅲc類で、奥壁高に比した棺座は「%」で高いものが高頻となる。他の類では低位なものが主体であり、5～10%の最頻値を持つものが大半を占めるものであった。Ⅲb・Ⅲc類の付帯施設Bでは、1→2→3へ玄室高に占める棺座高の「%」が高くなり、Ⅲ類のなかでもa類との相違は明らかなものである。他の類との比較における総体的な側面からみても、県内横穴墓のなかでは、付帯施設Bの玄室高に占める棺座の高さはかなり高い「%」として把握される。

棺座実数高

棺座はⅠ・Ⅱ類においては1～20cm台の低位なものが中心であり、Ⅰa3類（台形・前壁痕跡化）で一部高い棺座の存在も確認されている。なかでⅡ類に関しては、造付石棺が他の類より比較的多く検出されており、高段で狭い面積のものが主体となる。棺座は低段で広い面積が主体となり、Ⅱ類におけるところでは両者は相反したものであった。Ⅲ類はa類の付帯施設Aにおいて、Ⅰ・Ⅱ類と同様に低位なものが中心であり、数字的にも1～20cmのものが主体であった。Ⅲb類の付帯施設Bでは、70cm以上の高いものが主体となり特徴的な様相を呈す。なかには180cm以上のものの存在も確認され、数値的な幅としてはかなりの広がりがある。形態的な特徴としても棺座高の変化は捉えることができ、これらのことから高棺座は、付帯施設Bの敷設が一つの画期となることが想定される。

(柏木)

5. 数量的分析のまとめ

I類からIV類までの各類における数量的分析では、各平面形細分類の数量、平面形と縦断面形の組み合わせの数量を提示し、各類型内での傾向把握と想定しうる横穴墓の変遷過程や問題点の抽出を行ってきた。個々の類型ごとのまとめについては、もう一度「横穴墓の研究(1)～(5)」を参照願うとして、ここでは各類型内のみでの数量的比較・検討では、明確にし得なかった点や課題とした点及び今までの分析の中で横穴墓全体を通してみても特徴的で、横穴墓の変遷の中で主要と思われる点について再度まとめを行いたい。

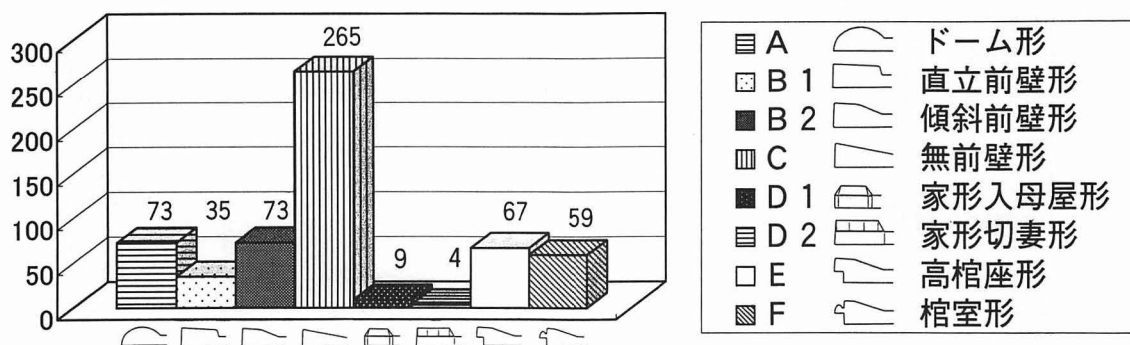
平面形態の分析

トータルの数量的検討を行うにあたって、操作する資料(横穴墓)の整理を最初に行いたい。各類型の分析では、平面形の分析は平面形が判明しているものすべてを使用しており、その総数は711基である。一方、縦断面形の判明している横穴墓は合計581基である。前回までは、この両者の数字を分析内容によって使い分けてきたが、今回は全体の中で主要と思われる点を明確するという目的から、使い分けの煩雑さを避け、縦断面形も判明しているもののみを取り上げていく。なお、平面形態のみ判明のものと、縦断面形も判明している横穴墓の比については、第3表の通りである。数量比の誤差では、Ⅲ類撥形の誤差が大きくなっているが、これはⅢ類の細分形態の中で平面形と縦断面形との組み合わせが規制されている分類が存在するためであるが、その細分比差も最大1.8%であるため、検討にあたって統計学的にも多大な影響はないものと考えられる。以下要点をまとめていく。

- ①平面形の細分形態で最も多い横穴墓は、撥形の無施設(低棺座・有石棺含む)形・Ⅲa類で161基を数える。続いて台形の前壁痕跡化形・Ⅰa3類(89基)、撥形棺室・Ⅲc類(59基)、撥形高棺座・Ⅲb類(58基)が続き撥形の優位が明白で、撥形棺室・Ⅲc類、撥形高棺座・Ⅲb類も一定量存在する結果となっている。
- ②方形・Ⅰ類は前壁が痕跡化するにつれ(Ⅰa1・Ⅰb1→2→3)数が減少するが(第9・10図)、台形・Ⅱ類は前壁痕跡化が進むにつれ増加する(第11図)。

平面形と縦断面形の組み合わせの分析

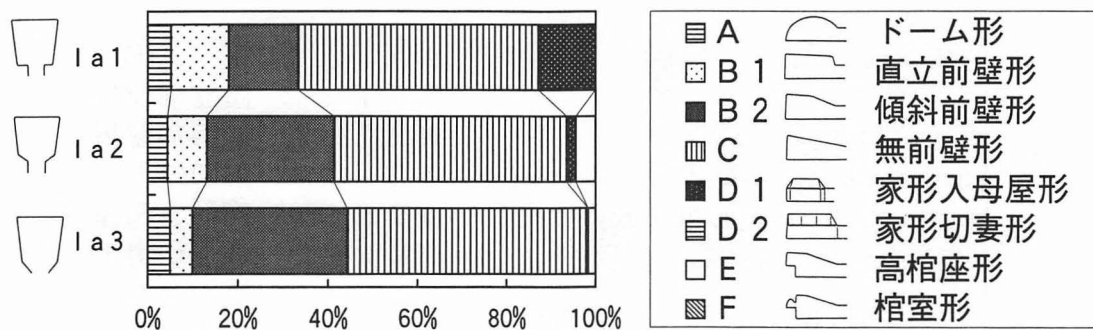
①平面形と断面形の組み合わせに様々なバリエーションが存在する。平面形分析の結果から規格性の高いと考えられる方形平面・Ⅱ類でも天井形はドーム・有前壁(直立/有段)・B1、有前壁(傾斜/痕跡化)・B2、無前壁・C、家形入母屋・D1、家形切妻・D2天井形との組み合わせが認められる。Ⅰ・Ⅱ類では平面前壁が110°以下である、方形・Ⅱa1類、長方形・Ⅱb1類、長台形・Ⅱb1類を除くすべてが、無前



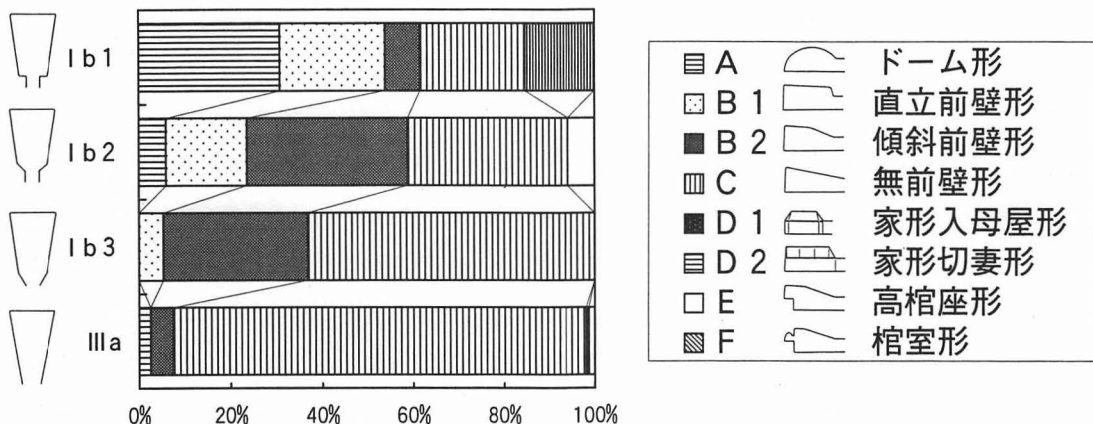
第8図 縦断面形(天井形)の割合

第3表 各分類の数と割合

大分類	平面概念図	平面形の割合1 (平面形のみ判明含む)		平面形の割合2 (縦断面形も判明しているもののみ)		誤差	割合2を用いた分類内比
		総数	総量比	総数	総量比	比差	区分内比
I 類		269	37.8%	201	34.5%	3.3%	34.6%
II 類		98	13.8%	78	13.4%	0.4%	13.4%
III 類		307	43.2%	278	47.8%	-4.6%	47.8%
IV 類		37	5.2%	25	4.3%	0.9%	4.3%
I・II 類分類							
I a		199	28.0%	146	25.1%	2.9%	52.3%
I b		64	9.0%	49	8.4%	0.6%	17.6%
I c		6	0.8%	6	1.0%	-0.2%	2.2%
II a		44	6.2%	44	7.6%	-1.4%	15.8%
II b		33	4.6%	33	5.7%	-1.0%	11.8%
II c		1	0.1%	1	0.2%	0.0%	0.4%
I 類細分類							
I a1		53	7.5%	39	6.7%	0.8%	20.0%
I a2		60	8.4%	46	7.9%	0.5%	23.6%
I a3		86	12.1%	61	10.5%	1.6%	31.3%
I b1		18	2.5%	13	2.2%	0.3%	6.7%
I b2		21	3.0%	17	2.9%	0.0%	8.7%
I b3		25	3.5%	19	3.3%	0.3%	9.7%
I c1		6	0.8%	6	1.0%	-0.2%	3.1%
II 類細分類							
II a1		31	4.4%	26	4.5%	-0.1%	33.3%
II a2		20	2.8%	17	2.9%	-0.1%	21.8%
II a3		1	0.1%	1	0.2%	0.0%	1.3%
II b1		37	5.2%	27	4.6%	0.6%	34.6%
II b2		7	1.0%	6	1.0%	0.0%	7.7%
II b3		1	0.1%	0	0.0%	0.1%	0.0%
II c1		1	0.1%	1	0.2%	0.0%	1.3%
III 類細分類							
III a		190	26.7%	161	27.7%	-0.9%	57.9%
III b		58	8.2%	58	10.0%	-1.8%	20.9%
III c		59	8.3%	59	10.1%	-1.8%	21.2%
IV 類細分類							
IV a		9	1.3%	7	1.2%	0.1%	28.0%
IV b		16	2.3%	12	2.1%	0.2%	48.0%
IV c		6	0.8%	6	1.0%	-0.2%	24.0%



第9図 Ia類の縦断面比率

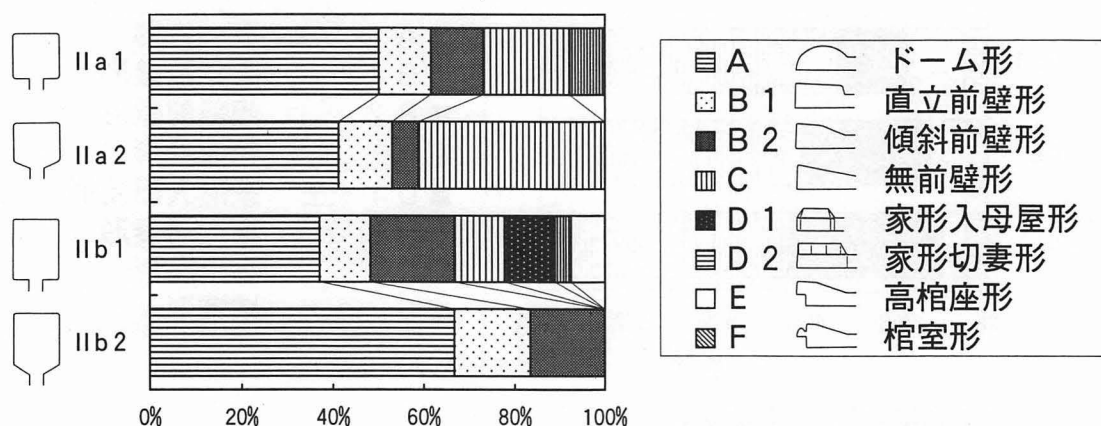


第10図 Ib類・Ⅲa類の縦断面比率

壁天井形との組み合わせが最も多い。

②一方、天井形からみた平面形態との組み合わせでは、家形入母屋形・D1は台形・Ia1類、台形・Ia2類、長方形・Ib1類、撥形Ⅲa類に限られ、家形切妻形・D2は長台形・Ib1類、正方形・Ⅱa1類、長方形・Ⅱb1類との組み合わせに限られる。また、ドーム形・Aは方形・Ⅱ類に最も多く(36基)、ついで不整形・Ⅳ類(18基)となる。有前壁天井B1・B2はいずれの平面にも一定量存在するが、主体的な組み合わせにはならない。

以上が横穴墓の数量的分析によって得られた、大枠での傾向である。これらの結果から、横穴墓の変遷を検討していくにあたって、想定し得る点をいくつか挙げていく。方形・長方形は前壁が崩れるのに従って数が減少し、台形・長台形では前壁が崩れるほど数が増加するという傾向が認められ、方形・長方形から撥形への変遷は想定しにくい結果となっている。一方、台形から撥形への変遷は、天井形の変化も複雑な形態から無前壁形への変遷として追認し得る結果となっている。特に長台形平面と撥形の変化は様々なバリエーションを持ちながらも、一定の傾向性が認められる。長台形と台形の関係は、長台形で前壁の形態が良好なもの・Ib1～2類の方が、台形で前壁の形態が良好なもの・Ia1～2類よりも、天井形が複雑なものとの組み合わせが多い。台形は一貫して無前壁天井との組み合わせが多く、平面前壁形態の崩れに従って前壁傾斜天井が微増するという異なる結果になっている。但し、台形には家形入母屋形との組み合わせも認められるため、必ずしも長台形の方が古相であると言い切ることはできない。



第11図 II類の縦断面比率

また、方形と長方形の関係も、方形は平面前壁形態が崩れるに従ってドーム形・家形天井の数が減少し、無前壁天井形が増えるというスムーズな変遷がみられるのに対し、長方形は平面前壁形態が崩れるに従い、天井形のバリエーションが減少し、ドーム形・直立前壁形・傾斜前壁形に限られるという異なった変遷をたどる。この結果のみでは、どちらが古相かを明確に判断することは不可能であり、台形、長台形、方形、長方形の出現時期と展開については、数量的分析のみによっては想定しがたい。あえて、推察するなら多様なバリエーションの存在は、横穴墓導入期の形態が複数存在したことや、異なる導入期と形態が横穴墓の変遷を豊富なものになっていることが考えられる。また、横穴墓の変遷は撥形への変遷に留まらず、最も単純化した撥形平面・天井無前壁形が確立された段階で、新たに高棺座形や棺室形などの複雑化した構造の横穴墓が一定数造られるようになる点にも注意を要すると思われる。(植山)

6. おわりに

横穴墓の研究は平成7年度に開始して以来、回を重ねて今回で6度目の検討となる。この間、我々の研究の成果を引用・参考文献として取り上げていただく報告書等が、僅かながらも見受けられるようになったことは、執筆者一同心強い限りである。一方そうした反面、複雑すぎて内容が理解できない、分類の設定が細かすぎて混乱が生じている、さらには細分のための細分遊び等といった激しい意見も耳にしている。今回の検討はこれらの意見をも踏まえ、より平易な内容とすべく心掛けたつもりである。

今回は、これまで検討を加えた内容のいわば総括であり、各形態相互の時間的な消長を含めた関連性や傾向性さらには形態の特徴について吟味したもので、具体的には出土土器からみた形態・構造の変遷と、数量的・数値的分析結果をまとめてみた。また、理解し難いと評判であったⅠ～Ⅳ類の各形態については、今回平面形と縦・横断面一括したものを図化し、分類の基準をより明確に提示した(第1～5図)。

横穴墓の研究は、今回で終了することを目途としていた。しかしながらこれまでの検討は、神奈川県という現在の行政区画を対象とした分類を基本とし、地域性については各類型における特質を抽出するにとどまり、各地域における横穴墓の出現から消滅に至る過程については詳細な検討が試みられていなかった。そこで次回は、これまで検討を加えた成果を基に相対的な変化を踏まえた上で、律令行政区画における「郡」程度の範囲、あるいは河川流域を視野に入れ、横穴墓の地域性の検証に努めてみたい。(上田)